

《思い思いの若者たち》

なぜ不登校生が増え続けるのだろうか

理事 布袋太三

不登校生の数がなぜか毎年ずっと増え続けている。どうしてこんなことになってしまったのか。学校が手をこまぬいているわけでもないし、おそらく懸命に努力を注いでいると思われるのに、どうしてなんだろうか。

生徒たちは学校が楽しくて有意義だと思えば、率先して学校へ行くはずだ。しかし、不登校になる生徒にとっては、学校はなんらかの理由があって楽しくもないし、有意義にも思えないということだろう。

そこで、とにかく大まかにでも原因に近い出来事や気持ちがわかれば、後はいろいろな手をつけて優しくそれを取り除く作業をやればいわけで、シンプルに考えればそんなに難しいことではないとも思える。

しかし、この原因探しには隘路となるものがいくつかあり、実は現在の学校ではそれがなかなかうまくクリアできないことが多い。

たとえば当該の生徒や保護者とじっくり話しあわなければならないのに、そうしたふつうの関係性を担任教師が日常的につくりえていない場合などは、端から相当難しくなる。

それにまあることだが、肝心の生徒自身が自分の状況を的確に言葉で表出しえない場合があり、専門的な知見を借りるなどやや困難を増すこともある。

それから、学校当局が生徒たちのそれなりの訴えに謙虚に耳を貸す柔軟さをほぼ持ちえていない場合など、学校には落度がないと言い切ってしまうたりすると決定的に難しい。

ともあれ、こうした隘路が解消されていないと

そもそものところで躓いて、親との折り合いも最悪になることもあり、原因理解や解決は遠のいてしまう。

私は何年前かにいじめが絡む不登校生の相談を受けたことがあったが、その時、先生方にまずはどうしてこんな事態に至ったか、学校としてはどう対処してきたかを問いかけたが、スムーズな回答が返ってこなかった。この学校は不登校へのマニュアルを踏まえた組織的な対応をネグレクトしていたし、保護者対応もズレまくっていて、結果として実に困難な事例へと発展してしまった。私には思いもかけない非常に苦い経験となった。

確かに、いじめや不登校への対処には学校全体の風通しの良さが試されるし、信頼感や組織力のようなものも試される。そして保護者との関係性も図らずも露になっていく。

私は現在深刻な事態になっていない学校でこそ、改めて落ち着いてこの際、不登校問題に取り組んではどうかと思っている。そのことで必ず、新たな学校の有り様に関わるヒントをいくつも獲得することができると思う。

現在の文科省マニュアルを越える自前の斬新なマニュアルづくりも視野にいて、田辺の学校にはぜひ努力してほしいものである。

学校は、いつの時代も子どもたちの遊びと学びの貴重な拠点である。学校が本当に誠実に取り組めば、不登校生は必ず帰ってくる。

子どもは誰でも友達と楽しい遊びと学びを求めている。だから、学校はどんなことがあっても真摯にそれに応えなければならない。



居場所としての子ども食堂



学習支援・子ども食堂担当 松下 泰子

1月30日和歌山市プラザホープにて「地域福祉推進フォーラム」で「居場所としての子ども食堂」と題して、2月5日には、田辺市民総合センターにおいて「子ども食堂開設支援講座」でお話させていただきました。

ハートツリーでは、2016年4月からひとり親家庭等の子ども達を対象に学習支援（無料塾）が始まりました。また、10月からは子ども食堂も月に1回開くこととなりました。

2016年頃から全国で子ども食堂が広がり始めて、昨年末には1万か所を超えました。

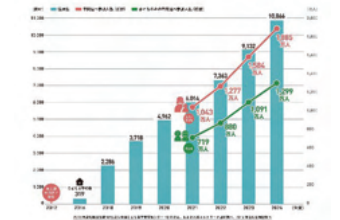
当初は、「食べられない子どもが行く所」というイメージがありましたが、今では誰でも参加でき、コミュニティづくりとしての機能を担うようになりました。

ハートツリーのひなた食堂は、学習支援の延長上にありますので、限定的ではありますが、塾に通う子ども達の居場所として学校であったことや家庭のことなどを自由に話せる場になっています。

中学校を卒業した後も遊びに来たり、悩みがある時は、相談に来たりしています。

また、同じ建物内のひなたの森（ひきこもり青年の居場所）に通っている人の中に料理の好きな人がいて、子ども食堂の調理のお手伝いをしてくれるなど、年齢に関係なく交流をしています。

子ども食堂は、それぞれ独自の形で営まれ、それぞれのつながりを求めて集まり、さらに広がっていくことでしょう。



全国の子ども食堂 10,866か所	
誰でも参加	78.4%
コミュニティづくり	57.8%
困窮者限定	5%
子ども限定	4%

和歌山県	101か所
和歌山市	33か所
田辺市	8か所
新宮市	7か所
2024年末現在	

